

対人ストレス・コーピングがストレッサーの解決認知を 媒介して精神的健康に及ぼす影響についての確証的検討

筑波大学大学院人間総合科学研究科 高本 真寛¹⁾

筑波大学人間系 松井 豊

A confirmatory study on the influences on mental health from coping for interpersonal-stress as mediated by solution-awareness for stressors

Masahiro Takamoto (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Yutaka Matsui (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study investigated the effects of interpersonal-stress coping on mental health via the perception of solved interpersonal stress events by using multiple regression analysis and structural equation modeling. Japanese undergraduate students (Study 1: $N = 342$, Mean age is 20.0, $SD = 1.30$; Study 2: $N = 275$, Mean age is 20.4, $SD = 2.13$) participated in the study. Results indicated an indirect negative path from active coping, to problem-focused coping and to psychological distress via the perception of solved interpersonal stress events. Furthermore, a direct positive path from avoidance behavior to emotion-focused coping, and to psychological distress, as well as an indirect positive path via the perception of solved interpersonal stress events was identified. A direct positive path from active coping, to problem-focused coping, and to subjective wellbeing was also confirmed. These results suggest that problem-focused coping and emotion-focused coping might have a differential effect on mental health.

Key words: stress coping, mental health, interpersonal stress

本論文は、対人ストレス経験時に行使されるコーピングが、対人ストレスの解決認知を媒介して精神的健康に及ぼす影響について検討することを目的とする。

Lazarus & Folkman (1984 本明・春木・織田監訳 1991) によって提唱された“トランスアクション理論”は、コーピング研究における代表的な理論として挙げられる。彼らの理論では、ストレッサーの経験とストレス反応の生起までに、ストレッサーに対する“認知的評価”と意識的な対処行動を示す“コーピング”を仮定しており、それぞれを理論の中核的

概念として位置づけている。

コーピングの代表的分類には、問題焦点型対処と情動焦点型対処の2分類が挙げられる。問題焦点型対処はストレッサーの解決を目的に行使され、情動焦点型対処はネガティブな情動反応の低減を目的に行使される。これまでのコーピング研究では、パーソナリティとの関連 (Connor-Smith & Flachsbart, 2007; Nes & Segerstrom, 2006) や精神的健康との関連 (Penley, Tomaka, & Wiebe, 2002) だけでなく、ストレッサーに対する脅威度の高さによって適切なコーピングが異なることを説明する適合性仮説 (Forsythe & Compas, 1987) など、数多くの研究が実施されており、研究知見が蓄積されている (Coyne

1) 現所属：日本学術振興会

& Racioppo, 2000)。

従来のコーピング研究では、ストレス反応やディストレスなど、ネガティブな心理的側面との関連が中心的に検討されてきた。しかし、近年では、Folkman (1997) や Folkman & Moskowitz (2000), Lazarus (2003a; 2003b) によってネガティブな心理的側面だけでなく、ポジティブ感情に代表されるポジティブな心理的側面を扱うことの重要性が指摘されている。実際、Stone, Kennedy-Moore, & Neale (1995) や Roesch, Vaughn, Aldridge, & Villodas (2009) はポジティブ感情についても測定を行い、コーピングの行使がネガティブ感情とポジティブ感情に及ぼす影響がそれぞれ異なることを明らかにしている。

上記の研究では、問題焦点型対処および情動焦点型対処と精神的健康との関連から、それぞれのコーピングの適切性を評価している。しかし、それぞれのコーピングの適切性を評価する際には、精神的健康との関連だけでなく、コーピングの行使意図が達成されたか否かも考慮する必要がある。具体的には、問題焦点型対処の行使がストレスの解決に寄与したか否か、情動焦点型対処の行使がネガティブな情動反応の低減に寄与したか否かである。上記の点を考慮することによって、選択されたコーピングが適切な効果を示したかを、より詳細に評価できる。二つのうち、後者については“ネガティブな情動反応の低減への寄与”と“精神的健康との関連”との間に対応関係があり、これまでの研究からも推測が可能である。一方、前者の問題焦点型対処における行使意図の達成の是非は、必ずしも精神的健康との関連との間に対応関係があるわけでない。そのため、問題焦点型対処の行使意図の達成の是非が評価可能なモデルを新たに検討する必要がある。

これまでの研究は、いずれもコーピングと精神的健康との間に直接的な関連を仮定して検討が行われてきた。そもそも、ストレス反応やディストレスの生起は、ストレスの経験によって生じる。したがって、これらネガティブな心理的側面の低減には、ストレスが解決したか否かを同時に考慮する必要がある。また、ネガティブな出来事とポジティブな出来事の経験は、ポジティブ感情やネガティブ感情に対して、インパクトの大きさや影響の持続性がそれぞれ異なり、非対称的影響をもつ (Taylor, 1991)。さらに、Folkman (1997) によると、ポジティブ感情はネガティブな出来事の経験と独立して生起する。つまり、ストレスの経験によって生起するストレス反応やディストレスは、ストレスの解決によって低減する可能性があるが、ポジティブな心理的側面 (ポジティブ感情や主観的

幸福感など) はストレスの解決に影響を受けない可能性が示唆される。以上の点を考慮すれば、コーピングと精神的健康との間にストレスの解決を媒介変数として仮定することによって、コーピングと精神的健康との関連がより精緻化される可能性が示唆される。

以上の議論をまとめると、(a) コーピングの適切性を評価する上で、ストレスの解決を考慮する必要性、(b) ストレスの解決は感情や精神的健康に非対称的な影響を及ぼす可能性が指摘される。そこで、本論文では、対人ストレス経験時に行使されるコーピングが、対人ストレスの解決認知を媒介して精神的健康に影響を及ぼすかについて検討する。研究1では上記の二つの観点に基づいて探索的検討を行い、続く研究2では研究1の結果に対する確証的検討を行う。

研究1²⁾

目的

対人ストレス・コーピングと精神的健康との関連を“解決認知”が媒介する可能性について、探索的に検討することを目的とする。

方法

調査対象と実施方法 2010年6月に東京都内のA大学に在学する大学生を対象に講義時間を利用した集合調査を実施し、342名 (男性116名、女性223名、不明3名; $M=20.0$ 歳, $SD=1.30$) から有効回答を得た。

倫理的配慮として、個人が特定されないこと、回答を拒否しても、途中で回答を止めてもよいこと等を明記し、口頭でも説明した³⁾。

質問紙の構成 1. フェイスシートには学年・年齢・性別の記入を求めた。

2) 高本・相川 (2012) の研究1および高本・相川 (2013) の研究1におけるTime 1のデータを再解析したものである。前者の論文は、本論文の研究1で使用したコーピング尺度の開発を目的としており、後者の論文は、コーピングと精神的健康との直接的関連の検討を目的としている。なお、本論文に執筆に当たり、データの使用方法について上記した論文における第二著者の承諾を得た。

3) 研究1は、第一著者が研究実施時に所属していた大学に研究倫理委員会が設置されていなかったため、研究倫理委員会の審査を受けていない。ただし、調査の実施に際して、社会心理学を専門とする大学教員1名が調査内容を事前に確認し、倫理的に問題がないと判断した上で実施した。

2. 対人ストレスの測定は高比良 (1998) の対人領域ライフイベント尺度短縮版15項目を使用し、各項目が示す対人ストレスをどの程度経験したかを4件法で回答を求めた。また、各対人ストレスの出来事がどの程度解決できたかを“1. 全然解決できていない”から“4. 十分に解決できた”の4件法で回答を求めた (以下解決認知とする)。

3. 対人ストレス・コーピングの測定は高本・相川 (2012) の対人ストレス・コーピング尺度30項目 (4件法) を用いた。

4. 精神的健康の測定には、以下の三つの尺度を用いた。第一は中川・大坊 (1985) が邦訳した日本語版 GHQ 精神健康調査票の12項目版 (4件法)。第二は人生に対する満足尺度 (Diener, Emmons, Larsen, & Griffin (1985) が作成し、角野 (1994) が邦訳した尺度5項目 (7件法))。第三は日本語版 PANAS (佐藤・安田, 2001) のうち、ポジティブ感情を測定する8項目を使用した (7件法)。Subjective Well-Being の構成要素のうち、認知的側面を人生に対する満足尺度によって測定し、感情的側面を日本語版 PANAS によって測定した。分析では、両尺度の項目平均を加算した得点を主観的幸福感の指標とした。

結果と考察

本研究で測定した各変数の記述統計量および各変数間の相関係数を Table 1 に示す。続いて、対人ストレス・コーピングが解決認知を媒介して精神的健康に影響を及ぼす可能性について検討するために、

重回帰分析の繰り返しによるパス解析を行った。

分析の結果、積極的行動は主観的幸福感に対して有意な正の偏回帰係数 ($\beta = .257, p < .001$) が見られ、回避型行動は GHQ に対して有意な正の偏回帰係数 ($\beta = .177, p < .001$) が見られた。また、積極的行動は解決認知に対して有意な正の偏回帰係数 ($\beta = .330, p < .001$) が見られ、回避型行動は解決認知に対して有意な負の偏回帰係数が見られた ($\beta = -.161, p < .01$)。さらに、解決認知は GHQ に対して有意な負の偏回帰係数が見られた ($\beta = -.124, p < .05$)。

研究1では、対人ストレス・コーピングと精神的健康との関連を“解決認知”が媒介する可能性について、探索的に検討した。その結果、積極的行動は主観的幸福感に対して直接効果を持ち、回避型行動は GHQ に対して直接効果をもつことが示された。また、積極的行動と回避型行動は“解決認知”を媒介して GHQ と関連をもつことが明らかにされた。

以上の結果から、対人ストレスの解決は GHQ によって測定される精神的不健康とのみ関連を持ち、コーピングと精神的不健康との関連を媒介している可能性が示唆された。そこで、続く研究2では、研究1によって確認された関係性の再現性を確認するとともに、“コーピング→解決認知→精神的不健康”という媒介過程の検証を行う。

研究 2

方法

調査対象と実施方法 2012年5月および9月に関

Table 1
各諸変数間の記述統計量と相関分析結果

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.
1. 解決認知	—	.292***	.175***	.071	-.084	.099*	-.139*	.159**
2. 積極的行動	.288***	—	.595***	.491***	.236***	.396***	.050	.259***
3. 状況把握	.175**	.605***	—	.290***	.353***	.368***	.051	.190***
4. 対人接近型行動	.062	.469***	.302***	—	.337***	.446***	.076	.165**
5. 回避型行動	-.091 [†]	.217***	.361***	.316***	—	.554***	.188***	.039
6. 情動焦点型認知的 対処	.093*	.384***	.373***	.436***	.550***	—	.003	.156**
7. GHQ	-.151**	.020	.060*	.031	.159**	-.019	—	-.527***
8. 主観的幸福感	.160**	.261***	.190***	.166**	.045	.155**	-.534***	—
平均値	2.5	2.7	2.8	2.6	2.3	3.9	28.2	3.7
標準偏差	0.66	0.69	0.83	0.69	0.85	0.95	6.41	0.97
α 係数	—	.82	.80	.69	.66	.80	.87	.91

注) [†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$; 左下は性別を統制した偏相関係数を、右上は単相関係数を示す
主観的幸福感の信頼性係数は、Feldt & Brennan (1989) 柳井・小笠原訳 (1992) による加算得点の信頼性係数を示す

東近郊の国立A大学とB大学に在学する大学生を対象に講義時間を利用した集合調査を実施し、275名から有効回答を得た（男性117名、女性149名、不明9名： $M=20.4$ 歳、 $SD=2.13$ ）。

倫理的配慮として、個人が特定されないこと、回答を拒否しても、途中で回答を止めてもよいこと等を明記し、口頭でも説明した。また、回答者に対する教育的配慮として、調査終了後に希望者には調査結果を含めた研究概略と調査内容に関連する研究知見の概説などを提供した。本研究は所属大学の研究倫理委員会の承認を得て実施された。

質問紙の構成 1. 対人ストレスは、過去1ヵ月以内に経験した出来事について自由記述で回答を求めた。

2. 対人ストレス・コーピングは、高本・松井(2012)の“改訂版対人ストレス・コーピング尺度”34項目を使用した（4件法）。過去1ヵ月以内に経験した対人ストレスに対して行使したコーピングについて回答を求めた。

同尺度は、高本・相川（2012）を改訂した尺度であり、2因子構造で構成される3下位尺度によって測定される。問題焦点型対処尺度は“認知-行動”カテゴリに相当する“状況把握”と“積極的行動”で構成される。他方、情動焦点型行動的対処尺度と情動焦点型認知的対処尺度は、それぞれ“接近-回避”カテゴリに相当する、“対人接近型行動”と“回避型行動”および“肯定的解釈”と“回避的思考”で構成される。

3. 対人ストレスの解決認知は、自由記述で回答した対人ストレスがどの程度解決できたかを、研究1と同じく4件法で回答を求めた。

4. 精神的健康の測定は、(a)中川・大坊（1985）が邦訳した日本語版GHQ精神健康調査票の12項目版（4件法）と(b)伊藤・相良・池田・川浦（2003）の“主観的幸福感尺度”12項目（4件法）を用いた。

フェイスシートには、学年・年齢・性別の記入欄を設けた。

結果

本研究で測定した各変数の記述統計量および各変数間の相関係数をTable 2に示す。続いて、研究1の結果に基づき、構造方程式モデリングによるパス解析を行った。なお、分析の際、改訂版尺度の下位因子間には、有意な相関が見られた下位因子間に相関関係を仮定した。また、精神的健康の指標であるGHQと主観的幸福感の間にも相関関係を仮定した。以上の手順に従って検証モデルと作成し、分析を行った（Figure 1）。分析の結果として得られたモデルの適合度指標は $CFI=.924$ 、 $RMSEA=.087$ 、 $\chi^2_{(17)}=52.411$ ($p<.001$)を示し、許容される数値が得られた。

導出されたモデルでは、積極的行動と回避型行動から解決認知に対して有意な偏回帰係数が見られ（それぞれ $\beta=.285$, $p<.001$ ； $\beta=-.208$, $p<.01$ ）、解決認知はGHQに対して有意な負の偏回帰係数が見られた（ $\beta=-.251$, $p<.01$ ）。また、積極的行動から主観的幸福感に対して有意な偏回帰係数が見られ（ $\beta=.176$, $p<.001$ ）、状況把握と回避型行動からGHQに対して有意な正の偏回帰係数が見られた（それぞれ $\beta=.224$, $p<.001$ ； $\beta=.111$, $p<.05$ ）。なお、モデル内で仮定した相関係数をFigure 1の脚注に示す。

Table 2
各諸変数間の記述統計量と相関分析結果

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.
1. 解決認知	—	.320***	.078	-.184*	-.256	.210**	-.043	-.312***	.237**
2. 積極的行動	.342***	—	.561***	.152*	-.136*	.458***	-.053	.127†	.138*
3. 状況把握	.066	.568***	—	.388***	.066	.604***	.116†	.199**	.134*
4. 対人接近型行動	-.180*	.141*	.396***	—	.205**	.243***	.214***	.222***	.099
5. 回避型行動	-.280***	-.147*	.046	.193**	—	.022	.459***	.211***	-.065
6. 肯定的解釈	.211**	.489***	.623***	.236***	.003	—	.191**	.055	.252***
7. 回避的思考	-.044	-.059	.111	.239***	.493***	.155	—	-.059	.073
8. GHQ	-.364***	.130†	.158*	.195**	.203**	.059	-.051	—	-.469***
9. 主観的幸福感	.225**	.145*	.148*	.111	-.087	.243***	.072	-.422***	—
平均値	2.7	1.7	3.7	2.0	2.4	1.3	3.9	27.8	34.0
標準偏差	0.98	0.59	1.00	0.78	0.70	0.39	1.11	5.92	5.00
α 係数	—	.811	.835	.799	.719	.608	.721	.740	.834

注) † $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$ ；左下は性別を統制した偏相関係数を、右上は単相関係数を示す

積極的行動と回避型行動が対人ストレスの解決認知を媒介して精神的健康に影響を及ぼすという、媒介過程が改めて確認された。そこで、積極的行動と回避型行動が解決認知を媒介してGHQに及ぼす間接効果の有意性検定を、ブートストラップ法を用いて行った。なお、間接効果の95%CIの推定は、パーセントイル法を用いた。分析の結果、積極的行動と回避型行動が解決認知を媒介してGHQに及ぼす間接効果はともに有意であった（積極的行動： $\beta = -.071, SE = .027, 95\%CI [-.123, -.018]$ ；回避型行動： $\beta = .052, SE = .025, 95\%CI [.002, .101]$ ）。

考察

本研究は、対人ストレス経験時に行使されるコーピングが、対人ストレスの解決認知を媒介して精神的健康に及ぼす影響について検討することを目的とした。

二つの研究を通して、積極的行動および回避型行動は、対人ストレスの解決認知を媒介することで、精神的不健康と関連をもっていた。また、状況把握と回避型行動は精神的不健康と直接的な関連をもち、積極的行動は主観的幸福感と直接的な関連をもっていた。さらに、対人ストレスの解決認知は、精神的不健康とのみ有意な関連をもち、主観的幸福感とは有意な関連をもたなかった。

コーピングと精神的健康との関連に関するメタ分析（Penley et al., 2002）では、問題焦点型対処が適応的方略として機能し、回避型コーピングが不適応的方略として機能することが示されている。そのため、本研究で示された積極的行動と回避型行動の結果は、Penley et al. (2002) によるメタ分析の結果を支持する結果と考えられる。また、本研究から、上記の二つのコーピングと精神的不健康との間に解決認知が媒介変数として機能することが示された。したがって、積極的行動および回避型行動と精神的不健康との関連の一部は、解決認知によって説明可能であることが示唆された。

一方、本研究では、問題焦点型対処に相当する状況把握がGHQとの間に正の関連を示した。状況把握は対人ストレスの客観的把握や問題解決に向けた方法の立案を目的としており、ストレス者に直面した際に初期の段階で行使される（杉浦・杉浦・丹野, 2005）。そのため、ストレス者の脅威度が高いほど、多く行使される可能性がある。したがって、本研究で状況把握とGHQとの間に正の関連が見られた理由には、ストレス者の脅威度という第三変数による影響も考えられる。この点については、今後、さらなる検討が必要である。

他方、対人ストレスの解決認知は、精神的不健康とのみ有意な関連を示し、主観的幸福感とは有意な

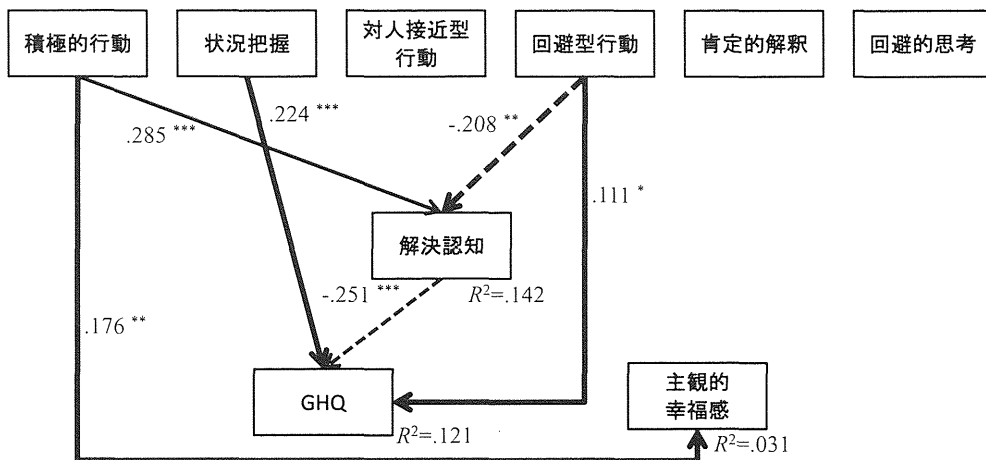


Figure 1. コーピングが解決認知を媒介して精神的健康に及ぼす影響^{a) b)}

^{a)} * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

^{b)} “積極的行動”と“状況把握” ($r = .576, p < .001$)、 “積極的行動”と“対人接近型行動” ($r = .165, p < .05$)、 “積極的行動”と“回避型行動” ($r = -.154, p < .01$)、 “積極的行動”と“肯定的解釈” ($r = .474, p < .001$)、 “状況把握”と“対人接近型行動” ($r = .382, p < .01$)、 “状況把握”と“肯定的解釈” ($r = .606, p < .001$)、 “状況把握”と“回避的思考” ($r = .111, p < .05$)、 “対人接近型行動”と“回避型行動” ($r = .177, p < .01$)、 “回避型行動”と“肯定的解釈” ($r = .247, p < .001$)、 “回避型行動”と“回避的思考” ($r = .443, p < .001$)、 “肯定的解釈”と“回避的思考” ($r = .206, p < .001$)、 “GHQ”と“主観的幸福感” ($r = -.506, p < .001$)

関連を示さなかった。したがって、精神的不健康やストレス反応などを低めるためには、ストレス状況の解消が必要とされることが改めて確認された。また、主観的幸福感是对人ストレスの解決認知と有意な関連を示さなかった。そのため、ポジティブな心理的側面(主観的幸福感)はネガティブイベント(对人ストレス)の解決と独立して扱うことが可能であることを示唆する。今回の結果は、ポジティブ感情はネガティブイベントの経験とは独立して生起する(Folkman, 1997)という指摘を支持する結果として解釈することができる。

まとめと今後の課題

本研究は、コーピングが精神的健康に及ぼす影響を、对人ストレスの解決認知を媒介変数に仮定して検討した。その結果、精神的不健康を指標にした場合、解決認知が媒介変数として機能していることが示された。そのため、コーピングと精神的健康との間に对人ストレスの解決認知を仮定することで、それぞれのコーピングがどのようにして精神的健康と関連を示すのかを、より詳細に把握することが可能となった。また、对人ストレスの解消という、ネガティブイベントの消失が精神的不健康と主観的幸福感に対して非対称の影響を及ぼすことも示された。以上の二つの知見は、現実場面において对人ストレスに直面している個人や、对人ストレスを経験した際に辿る一連のプロセスの理解の一助になると考えられる。

本研究に関する今後の課題には、以下の2点が挙げられる。第一は、個々人が経験した对人ストレスの内容の考慮である。本研究では、調査協力者が回答した对人ストレスの内容を考慮した分析を行っていない。しかし、对人ストレスの相違によってコーピングの働きが異なる可能性は十分に考えられる。そのため、对人ストレスの内容を考慮した検討も必要である。第二は、縦断的調査の必要性である。近年のコーピング研究では、2時点もしくは3時点調査などに代表される典型的な縦断調査ではなく、日誌法などを用いた反復測定に基づくコーピングの個人内プロセスの検討の必要性も指摘されている(Somerfield & McCrae, 2000)。そのため、今後は日誌法などを用いたより詳細な検討が必要と考えられる。

引用文献

Connor-Smith, J.K., & Flachsbarth, C. (2007).

Relations between personality and coping: A meta-analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **93**, 1080-1107.

Coyne, J.C., & Racioppo, M.W. (2000). Never the twain shall meet ? : Closing the gap between coping research and clinical intervention research. *American Psychologist*, **55**, 655-664.

Diener, E., Emmons, R.A., Larsen, R.J., & Griffin, S. (1985). The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, **49**, 71-75.

Feldt, L.S., & Brennan, R.L. (1989). Reliability. In R.L. Linn (Ed.), *Educational measurement*. 3rd. New York: McMillan. pp.147-209. (フェルツ, L.S. & ブレナン, R.L. 柳井晴夫・小笠原春彦(訳) 信頼性 リン, R.L. 池田 央・藤田恵聖・柳井晴夫・繁樹算男(監訳)(1992). 教育測定学(原著第3版) C.S.L. 学習研究所)

Folkman, S. (1997). Positive psychological states and coping with severe stress. *Social Science and Medicine*, **45**, 1207-1221.

Folkman, S., & Moskowitz, J.T. (2000). Stress, positive emotion, and coping. *Current Directions in Psychological Science*, **9**, 115-118.

Forsythe, C.J., & Compas, B.E. (1987). Interaction of cognitive appraisals of stressful events and coping: Testing the goodness of fit hypothesis. *Cognitive Therapy and Research*, **11**, 473-485.

伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至(2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **74**, 276-281.

Lazarus, R.S. (2003a). Does the positive psychology movement have legs ? *Psychological Inquiry*, **14**, 93-109.

Lazarus, R.S. (2003b). The Lazarus manifesto for positive psychology and psychology in general. *Psychological Inquiry*, **14**, 173-189.

Lazarus, R.S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer Publishing Company. (ラザルス, R.S., フォルクマン, S. 本明 寛・春木 豊・織田正美(監訳)(1991). ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究— 実務教育出版)

中川泰彬・大坊郁夫(1985). 日本版 GHQ 精神健康調査票 日本文化科学社

Nes, L.S., & Segerstrom, S.C. (2006). Dispositional optimism and coping: A meta analytic review. *Personality and Social Psychology Review*, **10**, 235-251.

- Penley, J.A., Tomaka, J., & Wiebe, J.S.(2002). The association of coping to physical and psychological health outcome: A meta-analytic review. *Journal of Behavioral Medicine*, **25**, 551-603.
- Roesch, S.C., Vaughn, A.A., Aldridge, A.A., & Villodas, F. (2009). Daily diaries and minority adolescents: Random coefficient regression modeling of attributional style, coping and affect. *International Journal of Psychology*, **44**, 393-400.
- 佐藤 徳・安田朝子 (2001). 日本語版 PANAS の作成 性格心理学研究, **9**, 138-139.
- Somerfield, M.R., & McCrae, R.R. (2000). Stress and coping research: Methodological challenges, theoretical advances, and clinical applications. *American Psychologist*, **55**, 620-625.
- Stone, A.A., Kennedy-Moore, E., & Neale, J.M. (1995). Association between daily coping and end-of day mood. *Health Psychology*, **14**, 341-349.
- 杉浦義典・杉浦知子・丹野義彦 (2005). 心配の能動性と制御困難性：自由記述調査を通じて 人文科学論集 (人間情報学科編), **39**, 49-64.
- 角野善司 (1994). 人生に対する満足尺度 (the Satisfaction With Life Scale : SWLS) 日本版作成の試み 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 192.
- 高比良美詠子 (1998). 対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, **14**, 12-24.
- 高本真寛・相川 充 (2012). 行使意図を明確にしたコーピング尺度の開発と妥当性の検討 心理学研究, **83**, 108-116.
- 高本真寛・相川 充 (2013). コーピングとコーピング評価が精神的健康と後続のコーピングに及ぼす影響 心理学研究, **83**, 566-575.
- 高本真寛・松井 豊 (2012). 対人ストレス・コーピング尺度の改訂と妥当性の検討 筑波大学心理学研究, **44**, 39-47.
- Taylor, S.E. (1991). Asymmetrical effects of positive and negative events: The mobilization hypothesis. *Psychological Bulletin*, **110**, 67-85.
- (受稿 3月31日 : 受理 5月29日)